

3

カブトムシの森ものがたり

＜95年～99年 草刈期＞

森を育てる会（初年度は「カブトムシの森を育てる会」）の第1回目の活動は95年6月25日にカブトムシの森（以下カブ森）での草刈とカブトムシ飼育小屋の整備からはじまりました（このときの参加者に石橋英明さんのお名前があります）。これ以降、夏場の下草刈りを中心とした作業がおこなわれました。

ヒザの高さまでびっしり生い茂っていた草をカマで刈る作業です。手作業でしたのでヒヨドリバナやウバユリを残す選択的下草刈を行い、刈ってはいけない草木を気にしながらの作業は煩わしく感じ



95年12月のカブ森

ることもありました。刈った草は大きな草の山になり、布団のようにふかふかしていて、子どもたちが登って遊んでいました。大人にとっても、子どもの頃を思い出しながらの懐かしい作業だったり、はじめて体験する新鮮さだったり、草いきれが満ちた中、充実感を覚えていました。

この頃のクヌギは人の背丈ほどで、クヌギの生長調査で胸高直径を計る際、ついでに葉の枚数を数えるほどでした。生長調査では、カブ森A地区に、隣接するA、B、2つの10m四方のコドラート（調査区）を設け、草刈を行うコドラートAと草刈を行わないコドラートBとして、コドラート内のクヌギの生長の差と下層植生の種数を調べる調査を行っていました。草刈の有無がクヌギの生長に与える影響や、草刈が適度な攪乱となって植生種数の増加につながるのではないかとすることを検証するためのものでした。しかし、クヌギの生長の差は草刈だけが要因とは言えない（木と木の間隔や遺伝的要因など/00年3月10日の勉強会より）ことがわかりました。

これら以外の作業として、この頃にはドングリを実生から育てる苗床づくりや、多様な自然環境の創出を目的とした池作り、生き物の生育環境としての森の状態を測る蝶のルートセンサスなどがおこなわれていました。



＜00年～04年 間伐期＞

カブトムシの森は、そもそも行政によって造られたものです。

『油山市民の森「カブトムシの森・蝶の楽園」基本計画』（92年3月作成/福岡市農林水産局農林部林政課・（株）環ヴィトーム）によると、その将来像は、「福岡地方でカブトムシの成育に適したクヌギ・コナラ・クリを主体とした二次林の復元を目指す。ここで云う二次林はクヌギ・コナラを主とした混交林のことである。東日本に見られるようなクヌギ・コナラの単純林を造成するのではなく、あくまでも北部九州の里山の本来の姿である二次林を復元することを目指す。」また、混交林の樹種として「ヤマモモ、アカメガシワ、クロキ、ヤブツバキ、ヒサカキ等を混植したり、自然に芽生えて成長するとカブトムシ以外の甲虫や蝶類が見られるようになる。さらには野鳥にとっても良い住処となる」となっています。 [写真05年10月撮影]

99年ごろまでは、この計画に添って、植栽された樹木を保育するために草刈などの作業を行えばよかったのですが、00年ごろになると木々も成長し、保育のための草刈は必要なくなってきました。同時に、もやし林化した木々を間伐する必要がでてきました。しかし、経済林ではないカブ森には、会員それぞれが「里山」「生き物にとって」「きれい」「癒し」などの様々な目的（イメージ）を持たせており、それらの「思い」のコンセンサスを取りながら保全計画を立てる必要性がでてきました。そのため、ワークショップ（24～25分）や勉強会（26～28分）を行い、自分たちが目指す森づくりを考えていきました。

そこで確認された一つが、カブトムシを育てるための飼育場のような森をつくるのではなく、「里山の象徴としてカブトムシなどの甲虫（コウチュウ）が生息・観察できるような森づくりをめざす」というものでした。

これらの経緯の後、00年9月に間伐木の選木をおこない、11月25日に初めての間伐作業が実施されました。作業は、間伐木が比較的小さく、フラットな場所だったので難易度が低かったことや、石橋さんや迫さんなど技術のある会員がいたこと、さらに各人が他所で技術を磨いたりしてたので、問題なく行われました。02年にはセンター主催行事「森の将来像づくりワークショップ」の成果とこれまでの実績をもとに、具体的なカブ森の中・長期的管理計画（36分）を立て、施設の了解をいただきました。

02年の間伐実績としては7月からの7回の作業で、A地区は常緑樹（タブ・ユズリハなど）20本、クヌギ17本、C地区は常緑樹7本（これ以外にピラカンサ数本）の伐採をおこないました。自然が好きでこの会に入った人が多く、その必要性がわかっているにもかかわらず、木を伐ることに抵抗を感じる人もいました。しかし、いざ木を伐倒してみると、達成感を覚え、人と自然の関わり方の一つのあり方だと受け止められるようになりました。

これ以降、草刈は、ルート沿いの美観整備の目的で、年間3回ほど行われるようになりました。また間伐に伴い、出た材の活用が大きな課題となり、シイタケ栽培や木工教室での活用なども行いましたが、全ては活かしきれませんでした。また、甲虫の産卵床となるように堆肥床の整備も行われました。04年度までには02年の計画に沿った間伐作業が進められてきました。しかし、実際に進めていく中で計画に無理がある部分もあり課題が残されました。



02年の調査から

A地区

クヌギ 161本
コナラ 12本
最大幹直径 22センチ
最小幹直径 1センチ
平均幹直径 9.6センチ
間伐予定本数 46本
(クヌギ42本・コナラ4本)

C地区

クヌギ 63本
コナラ 0本
間伐予定本数 11本

<05年～ 計画の検証と順応的管理>

森の管理計画の最大の課題は、我々の「思い」だけが先行していた点です。02年に須田先生を招いての草本勉強会の際、先生はカブ森の林床植生を見て「針葉樹の人工林の林床のようだ」と言われました。私たちは「林床に花の咲く、季節感のある里山的な森」という理想像を持っていたカブ森ですが、元マスギ・ヒノキの植林地だったものを伐開して造成された場所です。先生の指摘は、森の持つ環境資源や森の管理の履歴などの制約の中で考える必要性、自然科学の視点から考える重要性を認識する一つのきっかけとなりました。そのため勉強会や調査（29分・40～42分）を重ねてきました。わたしたちの善意の環境保全活動が、実は最大の環境破壊になるのではないかとという危惧を払拭したいがためでした。まだまだ学ぶべきことは多く、森の状況をみながらの順応的管理を行っているところですが、今後も勉強を重ね、自然科学的な基盤の上に、会員の思いを形にする、そんな理想の森づくりに挑戦し続けていきたいと思っています。